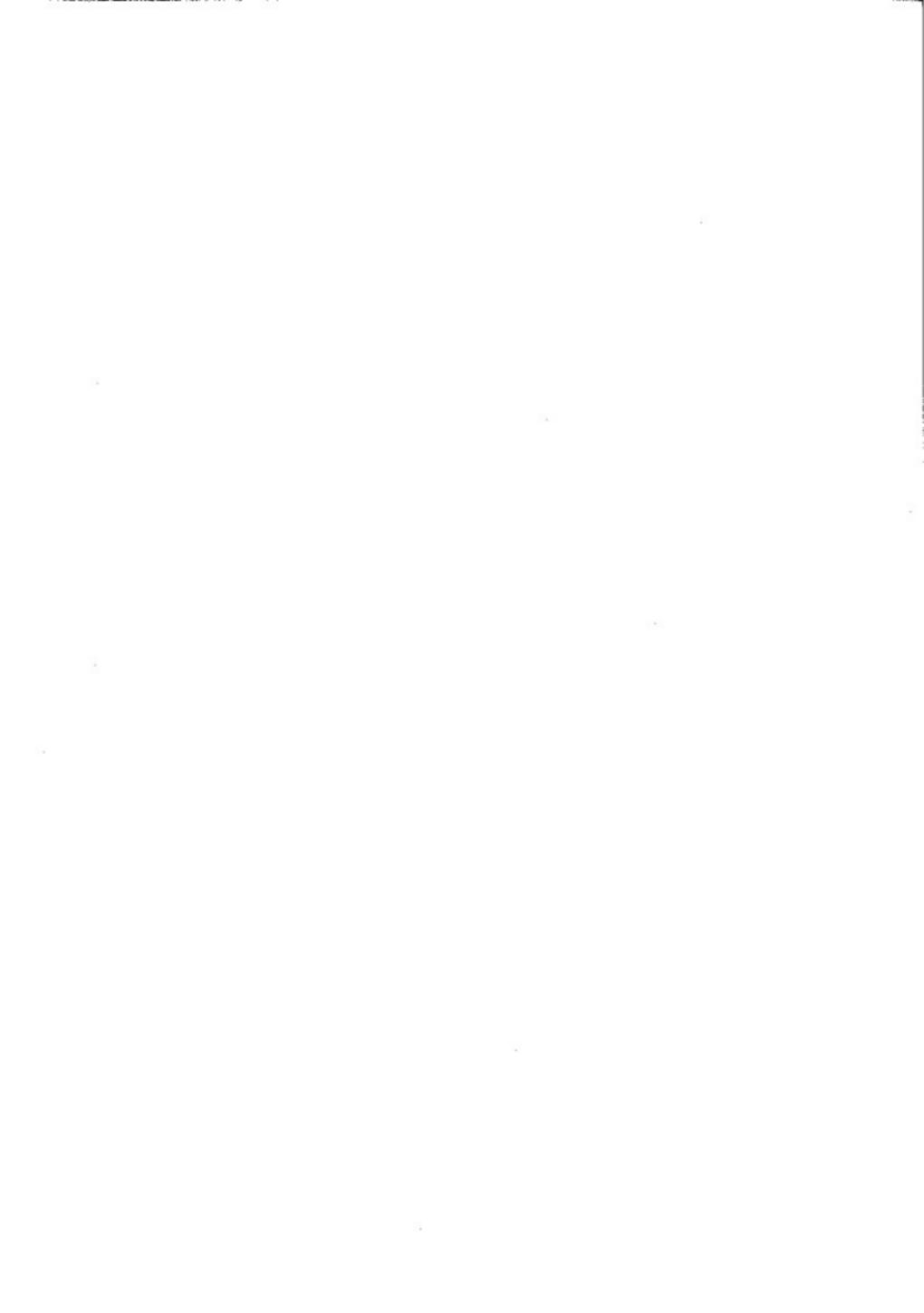


加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要

- 中山間地域総合整備事業（南河内こごせ地区）に伴う -

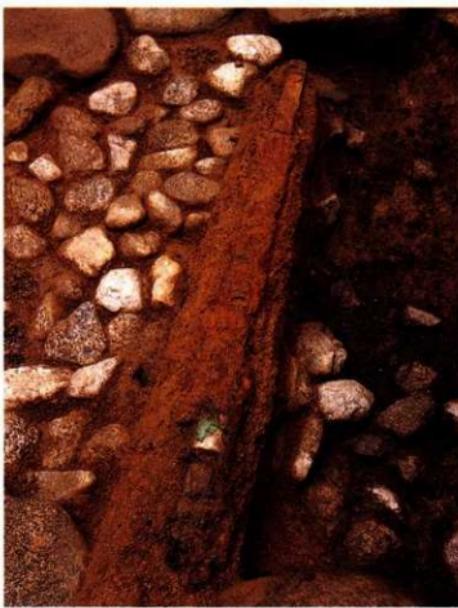
2002年3月

大阪府教育委員会





1. 2号埴黒漆塗箱



2. 同左出土状況



3. 2号埴石室床面遺物出土状況

はしがき

加納古墳群・平石古墳群は、南河内郡河南町にある古墳時代～飛鳥時代の古墳群として広く知られています。

今回の調査は、中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に先立つものです。この調査では、新発見の2基を含む4基の横穴式石室を主体部とする円墳などが調査されました。石室が完存していた2号墳からは、黒漆地に赤漆で雲文が描かれた鞘に納められていた大刀などの珍しい遺物も出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史に留まらず、日本の古代史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと確信されます。

発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆さま並びに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に伴う、南河内郡河南町所在加納古墳群・平石古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 調査は、文化財保護課主任技師今村道雄を担当者として、平成12年9月より平成13年3月までと平成13年8月から平成14年3月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ技師山田隆一、同小浜成が担当した。
4. 本書に使用した座標は、国上座標第VI系に基づき、方位は座標北、標高はT.P.で示している。
5. 航空写真測量は、株式会社日測に委託した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 今回の調査で出土した鉄製品の保存処理は、(財)元興寺文化財研究所に委託した。
7. 遺構・遺物の写真撮影は(有)阿南写真工房に委託した。
8. 調査にあたり、河南町教育委員会社会教育課 赤井毅彦、河内長野市教育委員会社会教育課 太田宏明、近づ飛鳥博物館 山本彰・上林史郎・岡本敏行、奥田尚、木下光弘各氏の協力を得た。特に、北加納地区区長竹本勇氏には、格別の御厚情を得た。厚く感謝します。
9. 発掘調査及び遺物整理・調査概要作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
10. 本書は今村が執筆、編集した。

本文目次

はしがき

例　言

第1章　調査に至る経過	1
第2章　遺跡の位置と環境	1
第3章　調査結果	6
1～16区の調査概要	6
加納1号墳の調査	7
加納2号墳の調査	10
加納5号墳の調査	11
加納6号墳の調査	13
バチ川古墳、バチ川2号墳、大原古墳	14
第4章　まとめ	18

挿図目次

第1図　平成13年度南河内ごせ地区	2
第2図　古墳分布図	3
第3図　1～16区位置図	4
第4図　7区飛鳥・奈良時代遺構平面図	5
第5図　加納1号墳石室内粘土層出土磁器実測図	6
第6図　16区包含層出土土器実測図	6
第7図　加納1号墳石室平面図、左右側面図	8
第8図　加納2号墳石室平面図、左側面図	9
第9図　1・2・5・6号墳出土須恵器実測図	10
第10図　加納5号墳石室平面図、右側面図	12
第11図　加納6号墳石室平面図、右側面図	13
第12図　バチ川古墳石室平面図、側面図	15
第13図　バチ川2号墳石室平面図	17
第14図　大原古墳石室平面図、側面図	17

図版目次

図版1　上、調査区遠景（東から） 下、調査区全景（上方が北）	図版7　上、2号墳敷石除去後の床面（南から） 下、2号墳敷石除去後の床面横断面、木炭層 (南西から)
図版2　上、1・2・5・6号墳調査前近景（東から） 下、1・2・5・6号墳全景（上方が北）	図版8　上、2号墳閉塞状況（北西から） 下、2号墳閉塞状況（南から）
図版3　上、1号墳全景（南東から） 下、2号墳全景（南東から）	図版9　上、5号墳全景（南から） 下、6号墳全景（南から）
図版4　上、2号墳前面状況（南東から） 下、2号墳調査状況（南東から）	図版10　上、7区全景（東から） 下、7区土坑7断面（北から）
図版5　上、2号墳奥壁（南東から） 下、2号墳床面と遺物出土状態（南東から）	図版11　上、バチ川古墳石室（南から） 下、バチ川古墳奥壁左上詰石（南西から）
図版6　上、2号墳右側壁（北から） 下、2号墳左側壁（北西から）	

加納・平石古墳群発掘調査概要

第一章 調査に至る経過

本調査は、大阪府教育委員会文化財保護課が環境農林水産部からの依頼を受け、平成11年度の試掘調査の成果を引き継ぎ、河南町加納地内で実施したものである。

調査要因の「南河内ごせ地区の農空間整備事業」とは、農作業の省力化・効率化を図り、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を有効に活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開寄与することを目的とし、平成10年から平成16年にかけて実施する計画の事業である。圃場整備対象面積は、河南町加納、平石、持尾地区と千早赤阪村、桐山地区の55.7ha（第1図）である。また、この地区には西行法師ゆかりの弘川寺、国史跡の一須賀古墳群・金山古墳と赤阪城跡、アカハゲ古墳やツカマリ古墳等多くの歴史・文化遺産があることも知られている。

本事業に先立ち、本課と事業主体である本府環境農林水産部は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、平成11年度には加納、平石、持尾、桐山の4地区については試掘調査を行い、シヨツカ古墳を発見した。両者は、その成果をもとに再度協議を重ねた結果、平成12年度は加納地区と桐山地区の事前発掘調査を行うことになった。今回報告するのは、2地区のうち加納地区の一部7haで実施した1~16区約5,105m²の発掘調査の結果である。

第二章 遺跡の位置と環境

加納1、2号墳やシヨツカ古墳、ツカマリ古墳等が位置する平石谷は、葛城山系岩橋山を水源とし平石谷を分水嶺とする平石川が形成したものである。葛城山系西麓には谷が幾筋も刻まれ、麓には小さな丘陵が多く見受けられ、最近は里山としての見直しが行われ始めている。

平石川流域には、標高658mの岩橋山山頂付近の持尾古墳群をはじめ下流域の加納古墳群と平石古墳群の3古墳群が東西3.5km、南北1.5kmの範囲に分布している。南には白木古墳群や金山古墳、丘陵を隔てた北には一須賀古墳群、王陵の谷とも呼ばれている磯長谷には向山古墳（用明陵）、上城古墳（聖徳太子墓）、二子塚古墳、高松古墳（推古陵）が密集している。この中で、発掘調査により一須賀古墳群が古墳時代後半を中心とする古墳群、金山古墳と平石古墳群のアカハゲ古墳、ツカマリ古墳（『河南町誌』昭和43年1月、河南町役場）が飛鳥時代の古墳あるいは終末期の古墳である。この他、（第2図10）にある古墳については、大正2年、梅原未治氏（『河内踏査報告』『考古学雑誌』四卷三号）が北加納バチ川にある切石石碑の古墳として紹介していたが、今日まで所在が知られなかった古墳である。この古墳を北加納地区長や地元諸氏の尽力により約90年ぶりに確認すると同時にバチ川2号墳（第2図11）を新規発見することができた。なお町誌には調査の機会がないまま工事で破壊された古墳も報告され、本府文化財分布図（1986年）には白木小学校東側に立地していた2基の古墳とツカマリ古墳の北側の古墳（第2図12~15）が記載されているがいずれも土取り工事で所在があやふやになっている。このうち内部主体が横

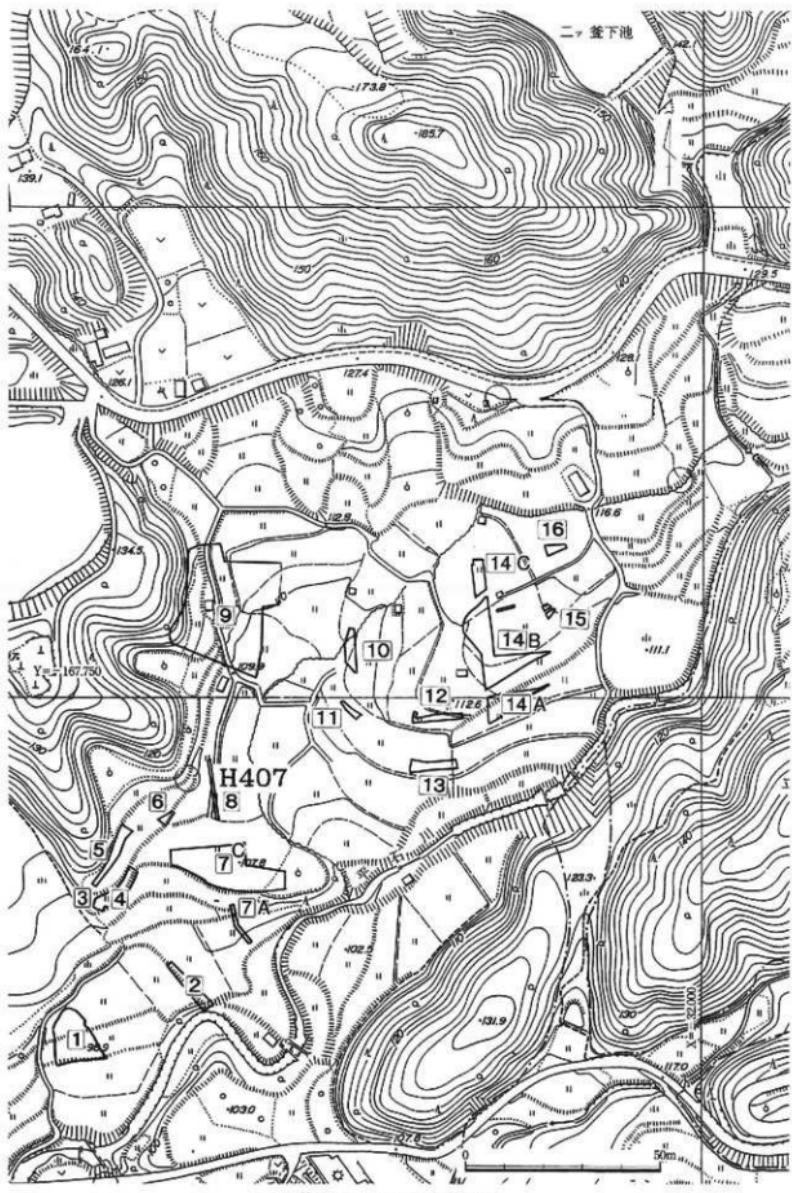


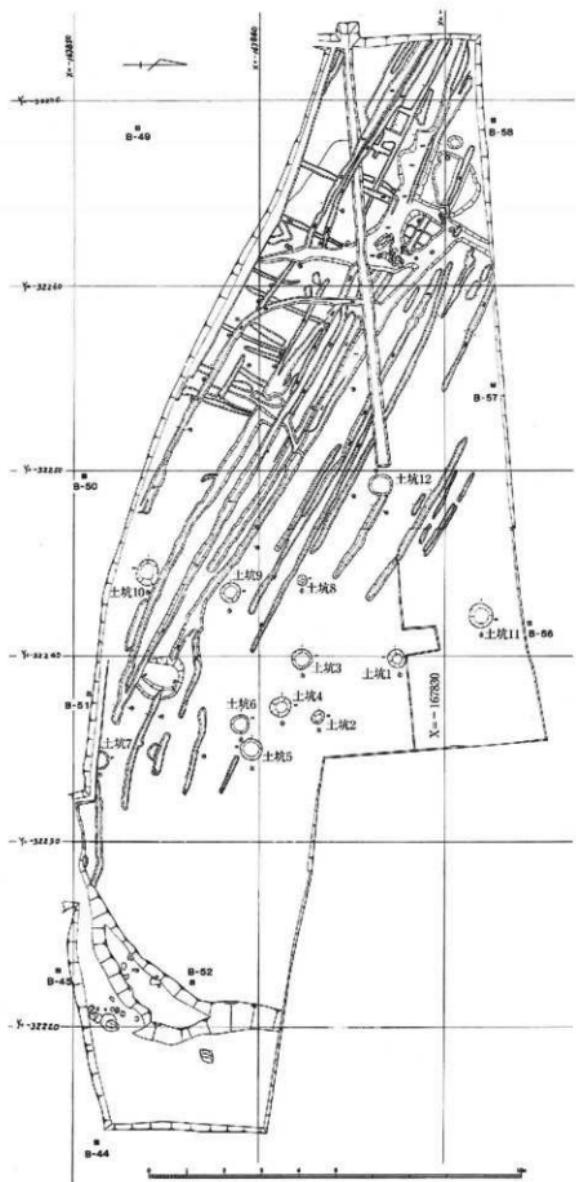
第1図 平成13年度南河内こごせ地区（加納、平石、持尾、桐山地区）



第2図 古墳分布図

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 加納古墳群 1号墳 | 9 同大原古墳 |
| 2 同 2号墳 | 10 同バチ川古墳 |
| 3 同 5号墳 | 11 同バチ川 2号墳他 |
| 4 同 6号墳 | 12~15 同ツカマリ北古墳他 |
| 5 同 7号墳 | 16 平石古墳群(無名古墳) |
| 6 平石古墳群シヨツカ古墳 | 17~19 一須賀古墳群P支群 2~4号墳 |
| 7 同アカハゲ古墳 | 20~23 同M支群 2~5号墳 |
| 8 同ツカマリ古墳 | |





第4図 7区飛鳥・奈良時代遺構平面図

穴式石室であることを確認された古墳もあるが、詳細については不明な点が多い。

第2図9は巴チ川古墳と同様に地元有志の協力によって発見した花崗岩の切石の古墳である。古墳の名前は小字名から大原古墳と呼びたい。

第三章 調査結果

1~16区の調査概要

1区から16区（第3図）は東西、南北とも300mの範囲にあり、西端の1区は標高約100m、ほぼ中央の7、9区は標高約107~113m、東端の16区は標高約117mにある。調査地はいずれも棚田地帯で西と北には小さな丘陵が、南は平石川と東西に伸びる丘陵、東は葛城山系の山々に取り囲まれ、眺望は南西方向がわずかに開けている。

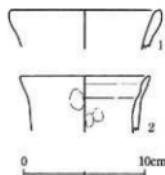
遺構・遺物の検出された地区は表のとおりである。

1~16区検出遺構・遺物一覧表

調査区名	面積 (ha)	検出遺構	出土遺物	時代・時期
1区	428	畦畔	土師器、須恵器片	中世以降
2区	126	自然溝	土師器、須恵器片	中世以降
3区	39	-	-	-
4区	59	-	-	-
5区	114	-	-	-
6区	19	-	陶器	近世
7区	884	土坑12基	須恵器、土師器	飛鳥・奈良時代
		小溝多数	須恵器、土師器	飛鳥・奈良時代
8区	120	-	-	-
9区	2,055	1号墳	土師器、須恵器	古墳時代後半~飛鳥時代
		2号墳	土師器、須恵器	古墳時代後半~飛鳥時代
		5号墳	土師器、須恵器	古墳時代後半~飛鳥時代
		6号墳	土師器、須恵器	古墳時代後半~飛鳥時代
10区	102	-	-	-
11区	23	-	土師器、須恵器片	-
12区	107	-	-	-
13区	102	-	-	-
14区	878	-	須恵器、土師器	奈良時代
15区	8	-	-	-
16区	41	-	須恵器、土師器	奈良時代
計	5,105			

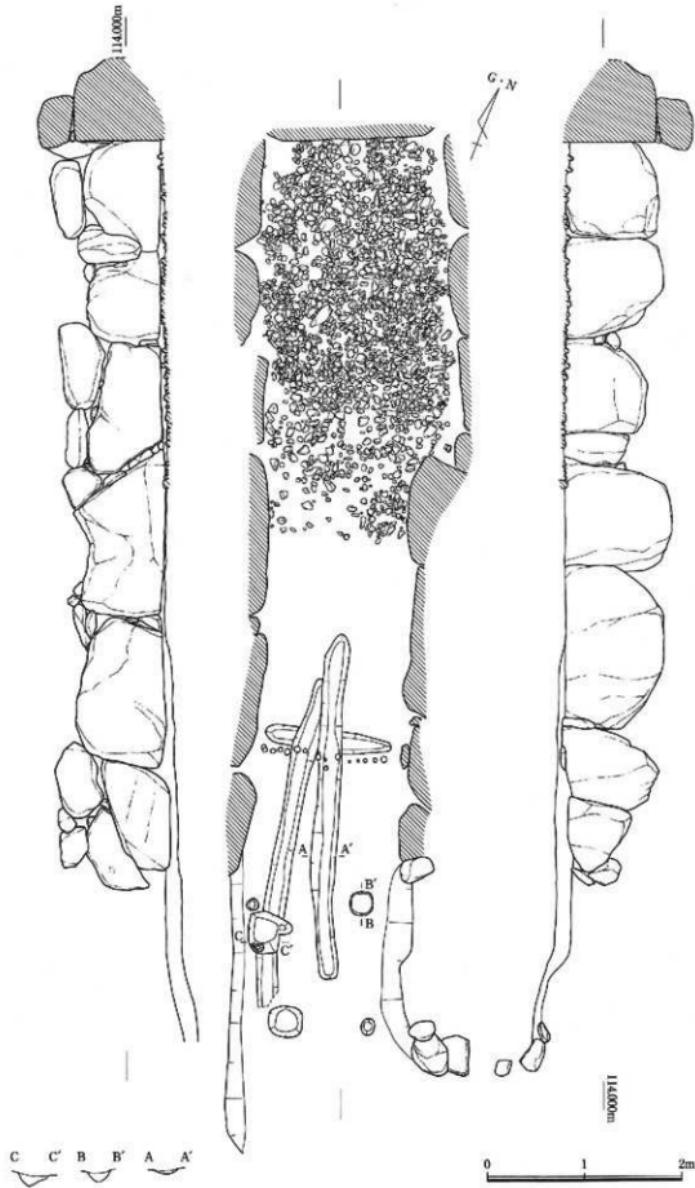


第5図 加納1号墳石室内粘土層出土
磁器実測図

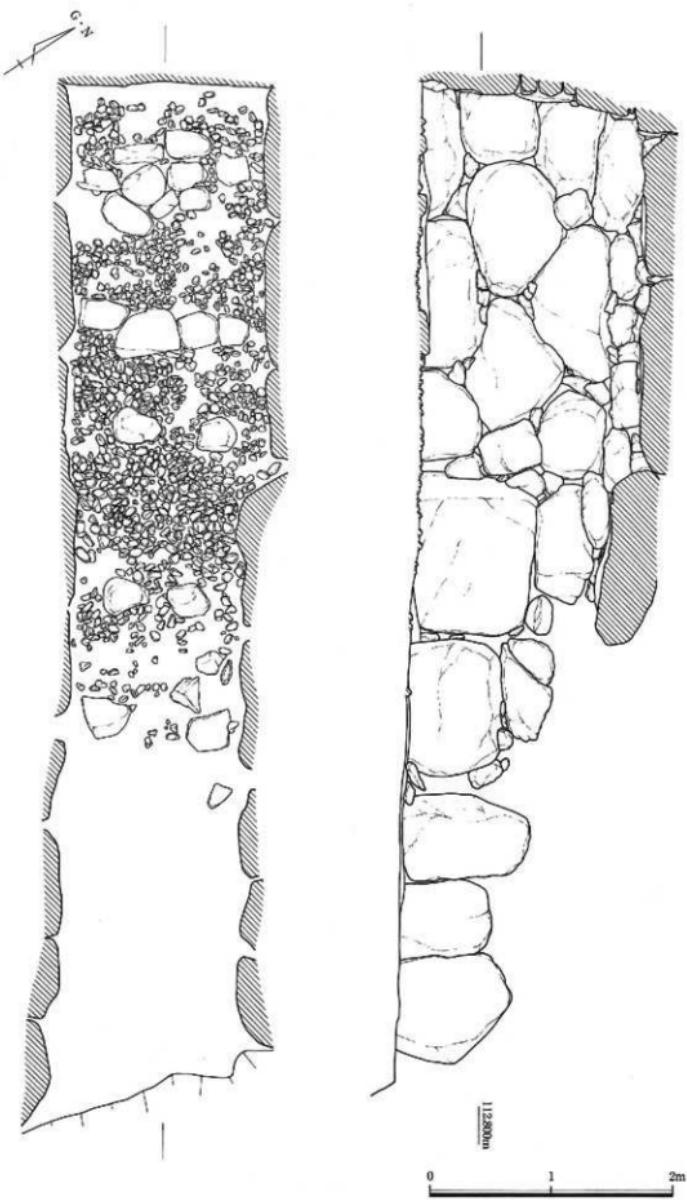


第6図 16区包含層
出土製塙土器実測図

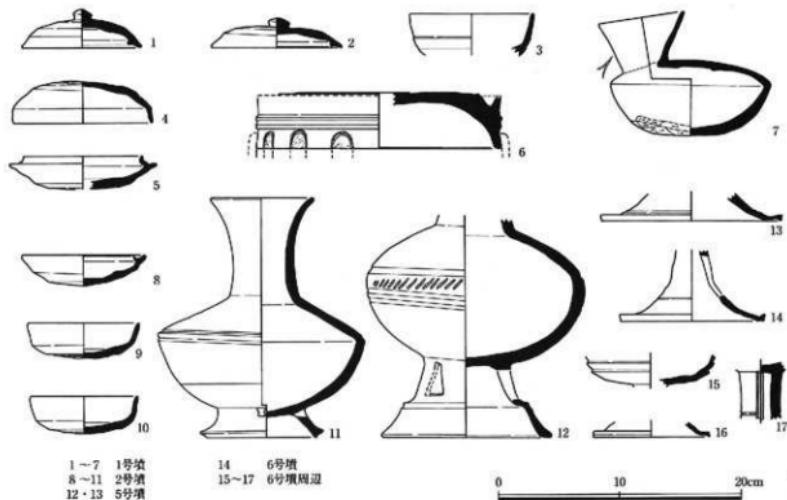
- 1区からは中世以降の水田痕跡を土層断面で確認している。
- 2～6区から遺構・遺物は検出できなかった。表土・床土の下は地山の個所が多い。
- 7区からは無数の小溝群と12基の円形土坑等を検出している。小溝は耕作関係、土坑1～12は墓等の埋葬関係の遺構と考えられる。柱跡等の遺構は確認できなかった。遺物は飛鳥・奈良時代の土器等がバスケット約一杯出土している。
- 9区では4基の古墳を調査することができた。このうち2基（5、6号墳）は調査中に新規発見した古墳である。2号墳のみがマウンドと石室がほぼ完存している。石室内には土が流入し、中世以降最近に至るまで盗掘の被害を数回受けたが副葬品の刀と須恵器壺や坏と金製耳環等が出土している。1号墳は取り壊した小屋の下から検出している。マウンドと石室は大きく損壊していた。石室床面の粘土層からは磁器（第5図）が出土し、奥壁や左右側壁は激しく焼けている。5、6号墳は水田の下から検出されたためマウンド、石室の損壊は激しい。遺物は瓦器片の他、副葬品と考えられる須恵器片が出土している。
- 10区から16区の調査区のうち、遺物は11区、14区と16区（第3図）から須恵器や土師器、製塩土器（第6図）等が若干まとめて出土している。
- #### 加納1号墳の調査
- 本古墳は丘陵の東斜面、標高113.5m付近に築かれた円墳である。石室主軸は、N-21°30'Wを示し、南南東に開口する。墳丘の規模は南北約13m、東西約14mである。周溝は東、北、西の3方向に幅約3～4mで馬蹄形のプランに廻らす。周溝を含む古墳の規模は南北約16m、東西約20mと推定される。マウンドと周溝東肩部との比高差は約4.5mを測る。周溝及びマウンド部から葺石や埴輪などは出土していない。
- 内部構造は左袖の横穴式石室である。石室はほぼ最下段の石組みを残すだけである。
- 奥壁は1石、玄室の左側壁は4石、右側壁は3石、羨道は左側壁4石、右側壁に3石を用いている。石材の用い方は、左側壁は石材を縦長に、右側壁は横置きに据えている。
- 玄室は、幅約1.8mから2m、長さ約3.3m、羨道は幅約1.5m、長さ約4.2m（左側）を測る。羨道の前には幅約1.4m、長さ約2mの墓道がつづき、その左先端に30～50cmの3石の自然石がある。墓道先端の3石の平面プランは外開きの状態を示している。石を利用した施設が存在した可能性も考えられる。閉塞は奥壁側前列中央に一辺60cm余の大きな自然石を据えその左右と上には30～50cmを利用し、羨道中央から墓道、奥壁から6.2～10mの個所に設置していた。
- 玄室床面には10cm内外の大きさの砾を敷き詰めている。棺台は認められない。
- 羨道には、幅20～25cm、長さ1.3mと3～3.5mの浅い溝や、径数cmの小ビットが列状に並ぶ他、墓道には大小5箇所のビットがある。これらの遺構の性格は、溝が石材を運搬するためのコロのレール痕跡、小ビットは簡易な封鎖施設、大小のビットは簡易な柱などの用途が考えられる。
- 遺物は、玄室から数本の鉄釘が出土している。須恵器（第9図1～7）のうち、前庭部埋土中



第7図 加納1号墳石室平面図、左右側面図



第8図 加納2号墳石室平面図、左側面図



第9図 1・2・5・6号墳他出土須恵器実測図

から出土した円面鏡（6）は径19.8cm、残存高4.6cmで上面は平滑である。平瓶（7）は器径13cm、器高8.5cm、底部をヘラ削りする。蓋環（4）は径11.3cm、器高3.4cmで天井部外側をヘラ削りしている。前庭部埋土中から出土した蓋（1）は口径9.6cm、器高3.2cm、（2）は口径10.2cm、器高2.4cm、外面はヘラ削りを施している。坏身（5）は立ち上がり部口径9.6cm、器高2.7cm、底部外面をヘラ削りする。（3）はピットから出土した口径10cm、残存高3.4cmの無蓋高坏の坏部である。いずれも胎土は良質で、焼成も良好である。

加納2号墳の調査

1号墳の南19m、標高112.3mの東向き斜面に立地する。墳丘は径約13~16m、残存高約2mを測る。墳形は円墳と推定される。周溝は、墳丘の南~西側を幅3~4m、深さ1mで円形に廻る。北側では1号墳の周溝との交差を避けるかのように北から東方向へ強く向きを変え、いびつなプランを示している。周溝と立地条件から2号墳の築造時期は1号墳より新しい可能性がある。内部構造は左片袖の横穴式石室で、石室主軸はN-56°30' Eを示し、南東に開口する。石室は羨道先端の一部を削られているが、全長（左）7.9mを測る。玄室は、最下段が奥壁1石、左3石、右同じく3石で、奥壁と側壁奥壁側が4段、玄門付近は3段積みで最上段の4段目に調整のため小ぶりな石を横積みにしている。

羨道は左側下段が5石、右側下段が6石用いている。羨道左側先端には石の抜き取り穴が2ヶ所ある。2段目から上は欠損しているものが多い。

玄室天井石は2石、羨道天井石は1石が認められる。玄室は、幅約1.55～1.6m、長さ約3.15m、高さ約1.8m、羨道は幅1.3～1.45m、長さ（左）4.7m、（右）5.45mである。

玄室の床には一辺10～15cmの均一な白い花崗岩の角礫を敷き詰めている。敷石の上には一辺20～50cmの板石を9枚並べて棺台に利用している。この他にも板石を配置している状況から3体以上の埋葬が考えられる。

礫の下には炭混じりの土、その下には2～10cmの木炭が敷き詰められ、玄室中央を縦断する石組排水溝上面に達する。木炭層は排水溝の上に厚く敷き、側壁寄りや玄室入り口側は薄くなる。

羨道の中央の床面は盜掘により大きく乱されている。天井石も半截され落下していた。

閉塞は、奥壁から6.7mから7.7mの個所に下段に長辺60cm余の自然石を中央に据えその左右には30～40cmの自然石を置き、その上に凝灰岩の板石を積み重ねている。凝灰岩板石は厚さ18～20cm、一辺40～80cmの大小の石材である。

遺物は玄室内の礫床から赤色彩文付き黒漆鞘入り刀（巻頭カラー1、2）一振りと径3cmの中空金製耳環、鉄釘多数、須恵器（第9図8～11）が出土している。（8）の壺は口径10cm、器高2.6cm、（9）の壺は口径9.1cm、器高2.9cm、8～10は天井部外面は未調整である。（11）の台付き壺は器高19.6cm、口径8.4cm、裾部径10cmである。体部中央には2条の凹線、台部には不整形なスカシが3方に穿たれている。

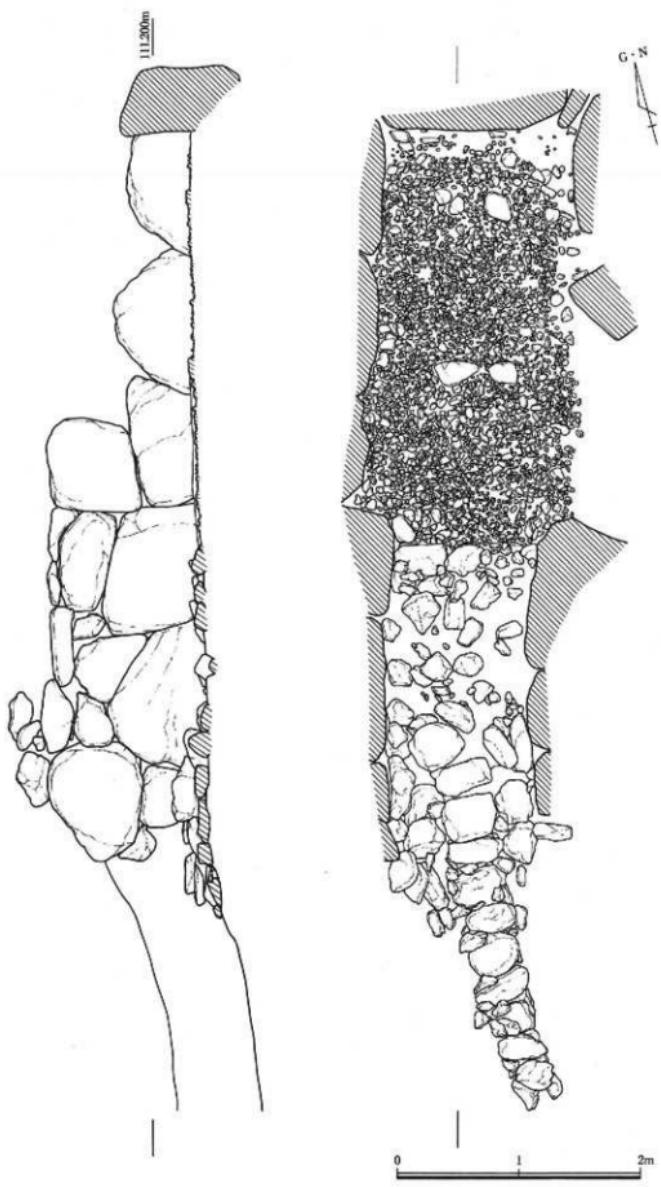
加納5号墳の調査

1号墳の東約18m、標高111m平坦地に立地する。石室の2段目から上と天井石、左側壁の大半は抜き取られている。墳丘と周溝は東半分が削平されている。復元値は南北14m、東西13mの円墳である。両袖の横穴式石室の位置は周溝の復元径から求めた墳丘の中心と西に2mほど偏っている。石室主軸はN-15°Eを指しほぼ南に開口する。残存している周溝は南から西、北方向で、幅は1.5～2mを測る。古墳の規模は南北17m、東西15mと考えられる。西周溝は長さ6mの排水溝（西側）を南端に取り付けている。

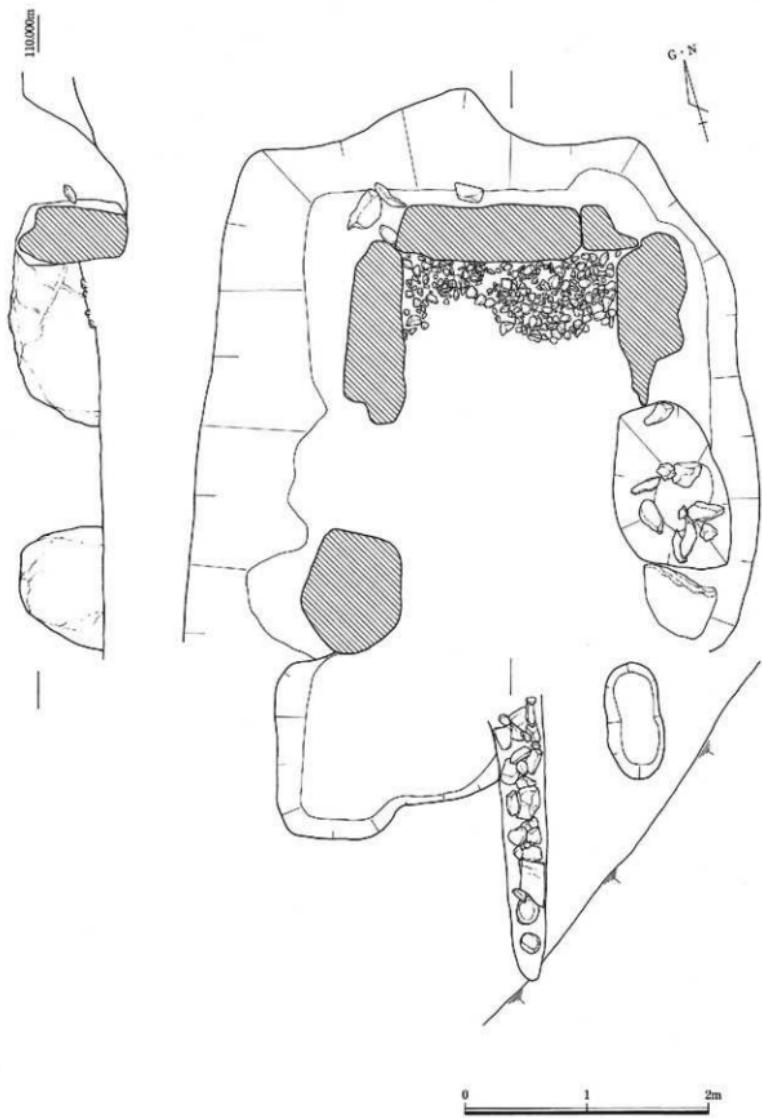
玄室は幅約1.5m、長さ約3.2m、残存高約1.2mである。残存している下段の石は奥壁1石に調整用の石、右側壁は3石である。羨道は幅約1.15m、長さ2.5～2.8m、残存高は1.5mある。右側壁の下段の石は3石である。羨道の長さは玄室より短く築かれている。

玄室には径数cmの小石に十cm前後の礫を混じえて敷きつめ、一部は羨道にまで及ぶ。礫敷きは羨道に設けられた仕切りの個所まで認められる。棺台に使用されたとみられる板石は奥壁から60cmと200cmの4箇所に面を揃え礫の上に据えている。棺材等は出土していない。

石組排水溝は羨道の中ほどから南側へ3.3m設け、さらにその先は南側の一段低い個所まで7m余の東側排水溝に接続している。50cm前後の大きな石は羨道内の個所に用い、徐々に使用石材の寸法を減らし末端部近くは30cm前後の小さい石を使用している。西側排水溝と東の石組排水溝との前後関係は土層断面から石組排水溝が新しいことを示している。



第10図 加納5号墳石室平面図、右側面図



第11図 加納6号墳石室平面図、右側面図

溝道には閉塞が観察された。溝道の玄室側1mには階段状に組んだ小さい石積みが右側壁に寄せて造り、排水溝は土で埋め戻さず、石組排水溝の蓋石の上に直接閉塞を築いている。

遺物は石室内から中世の土器片が数点は出土している。第9図12・13の壺と高壙の裾部は溝道先端部の西溝の埋土から出土している。他に数点の須恵器片が出土している。

西周溝は1号墳の周溝の東肩部との間で切り合い関係があり、1号墳周溝が埋没した後に2号墳の西周溝を築いている。また、西周溝を深く掘込んでいる要因として地下水と1号墳側から流下する雨水等に対する処置であると考えられる。

加納6号墳の調査

1号墳のほぼ東30m、5号墳とは南東に13m隔てた位置にある。石室主軸はN-15°-Eを指し、南に開口する。墳丘規模は南北11m、東西7m以上と考えられる。形は不明である。周溝は北から西側に幅1m余、長さ約6mと約7mの2箇所に認められる。

石室は東西4.5m、南北約6mの掘形の中に築いている。その中から奥壁、側壁、抜き取り穴、排水溝等を検出することができた。両袖の横穴式石室と考えられ、玄室は、幅約1.75m、長さ約3.3mになる。

奥壁は荒く加工・調整した大小の2石からなり、側壁との組み合わせ個所には打ち欠き調整した石材を使用している。

玄室内には整地土や搅乱土が堆積していたが、この土を取り除くと床には5cm~10cm大の花崗岩の礫を敷き詰めている。礫の下には吸水性のある黄色の砂質土を10cm余入れている。さらにその下には幅約40cmの暗渠を地山に穿ち、右側壁から奥壁、左側壁際に設けている。

遺物は第9図14の高壙部片が玄室床面から出土している。須恵器片も出土しているが少量である。鉄釘などは出土していない。

バチ川古墳、同2号墳、大原古墳（第2、12、13、14図）

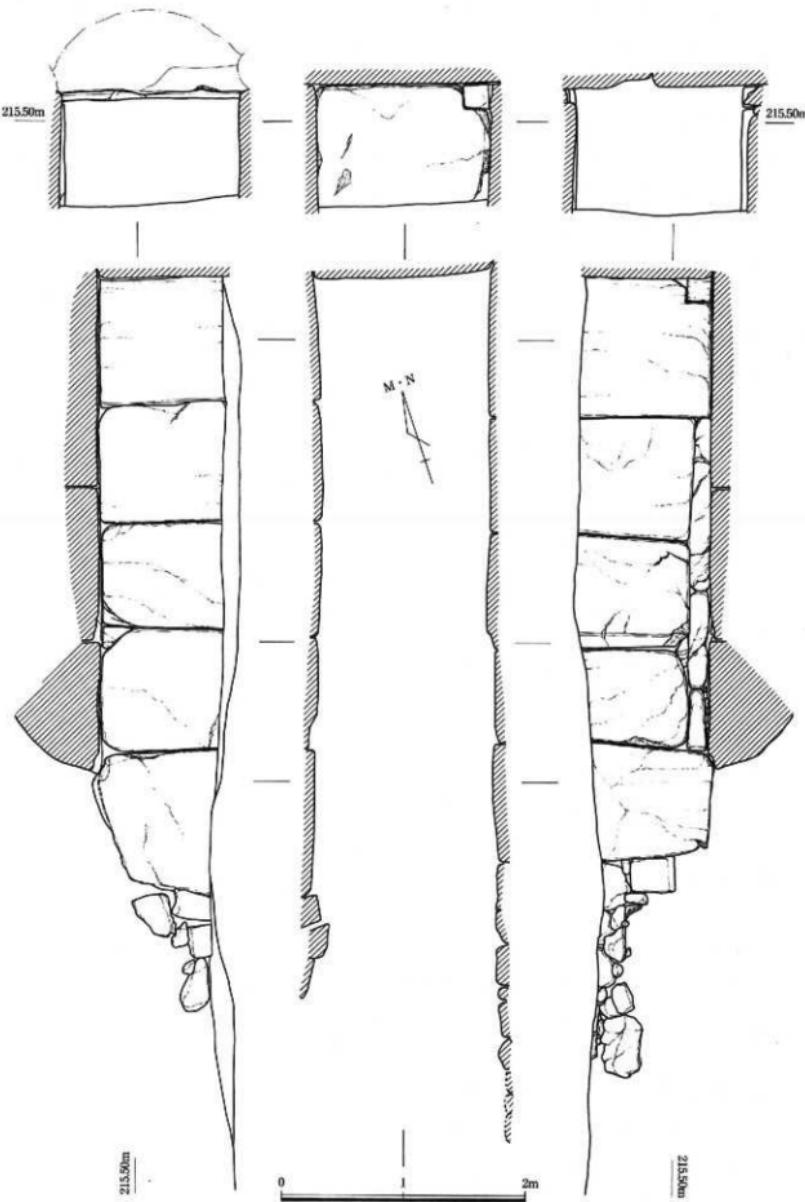
今回報告するバチ川古墳は、大正2年に「南河内郡加納村大字北加納字バチ川に一古墳あり」と報告された北加納の切石石櫛の古墳に地名、左奥壁と側壁のL字型石材、東壁の面取りした石材の存在等の特徴が一致することから同一の古墳と考えられる。

古墳は南東から北西に延びる標高200~215mの丘陵から15mほど下った南斜面に立地し、河南町中央から以南一帯と千早赤阪村までが一望できる。

墳丘と見られる個所や丘陵斜面は雑木に覆われているが、背後の斜面の掘削や高さ2m程のマウンドを観察できる。墳丘の平面形は明確にできないが石室を中心に約10mの範囲が盛り上がり上げている。

石室には土砂が流入しているが天井石までは1m前後の空間がある。

石室は、切石の花崗岩を用いた奥壁1石、右側壁（西側）5石、左側壁（東側）5石、天井石



第12図 バチ川古墳石室平面図、側面図

3石と小さい自然石で築いた長さ約2.3mの羨道からなる。奥壁左上のL字型詰め石は石英安山岩、通称寺山石と考えられる。いずれの石材にも漆喰を使用した形跡はみとめられない。

石室は、左側壁で長さ約7.1m、幅は奥壁前で約1.45m、奥から2.5mの3石目付近で約1.35m、入り口付近の奥から4.5mの5石目で約1.5m、羨道では幅約1.6mを測る。天井石先端は奥から約4mになる。各壁、天井石はほぼ水平・垂直に架構されている。築造後の歪やズレ等は少なさそうである。石材は左側壁に直方体に仕上げたもの、右側壁に各隅を丸みを持たせ石室内面が膨らむものを多く使用している。原材の凹凸を若干残している。奥壁左上のL字型詰め石は一辺約20cmに切石加工した石材である。

奥から2.93m、3石目の左側壁には幅8~12cmの一条の溝が垂直に刻まれている。対する右側壁には切り込みは見られない。ただし4石目の石材自体の窪みがあり、石室中央が10~15cm程狭まり、石室入り口から羨道にかけて徐々に開き、先端では幅約1.6mになる。

左側壁と奥壁の組み合わせ個所には、側壁に浅い溝状切り込みが認められる。

天井石の先端には幅10cm、深さ6cmの溝と中央右寄りに袋状の抉りを切り込んでいる。先端部左側は面取りされている。入り口天井石上面の傾斜は墳丘斜面に合わせている。

左右側壁上端部を小さくL字型に打ち欠き、天井石先端を架けている。各石材は直方体に加工したもののが大半で、複雑な加工や組み合わせは認められない。羨道は、自然石で築き、左側壁で長さ約2.3mを測る。石室は、奥壁から約3m、4mの天井石先端、羨道等の区画が認められる。

床面は、敷石など使用されている可能性は低い。

以上のような諸点がバチ川古墳に観察される。墳丘や立地条件などについては後日に記したい。

バチ川2号墳

バチ川古墳の北30mにあり、同一丘陵、斜面に立地している。2号墳の方が、比高差で10mほど高所の標高約210mにある。

斜面の掘削は観察できず、墳丘盛り土の存在は指摘しづらい。

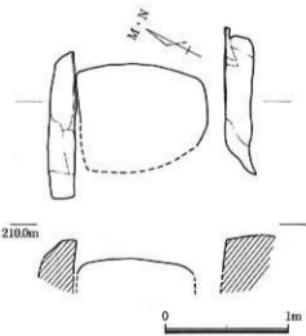
自然石の割り石を利用した左右の側壁とその間に落ち込んだ天井石らしき石材が観察できる。側壁の間隔は1.35mである。

大原古墳

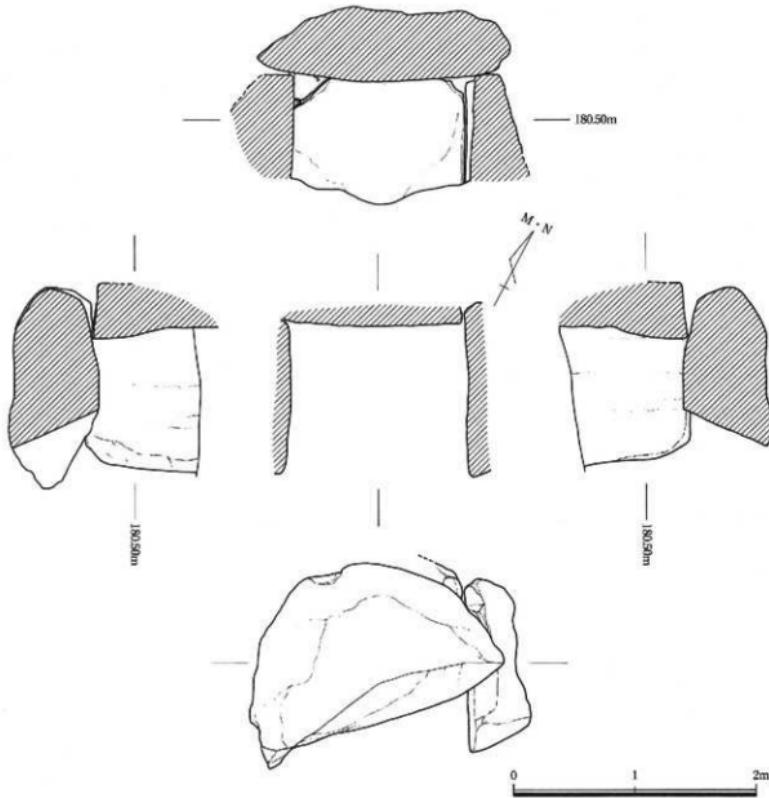
シヨツカ古墳からは300mほど離れた北側の狭小な谷間の南斜面中程に立地する。古墳は斜面の一部が南に張り出す地形にあり、切石の花崗岩で石室を築いている。石材の大半は抜き取られ、現存するのは奥壁1石、左右側壁各1石、破断された天井石1石である。眺望は河南町の南西部から富田林市・佐倅地区が少し望めるだけでひろくない。

古墳は周囲10m程の範囲に盛土の痕跡が認められるが、形は明確でない。背後の斜面に入れた一直線の掘削はよく残っている。

石室は、中に土が流入しているが幅約1.45m、長さ約1.25m、高さは約1mを測ることができる。



第13図 バチ川2号墳石室平面図



第14図 大原古墳石室平面図、側面図

左奥壁上端と同側壁の奥壁側上端には鍵型に15~25cmの打ち欠きが認められる。詰め石を入れるための加工と考えられる。一石ならばバチ川古墳のようなL字型詰め石が考えられる。

漆喰は右奥壁上端部の詰め石と右側壁の3箇所の目地に認められる。

床面には敷石などは認められない。

第4章 まとめ

今回調査できた4基の古墳は広範な加納古墳群の中では群集していることが判明し、古墳の築造や追葬時期、立地条件、内部構造等多くの点で新しい知見を得ることができた。新規発見の2基に加え90年ぶり確認されたバチ川古墳が当時と変わらぬ姿であった。

- 一. 1、2、5、6号墳の4基の古墳は出土遺物や遺構の切り合いから1号墳が最も早く築かれ、次いで2号、5号墳が築かれ、最後に6号墳が築かれたようである。4基の古墳の築造時期は6世紀末から7世紀前半頃が考えられる。
- 二. 5、6号墳は両袖の横穴式石室で短い羨道を有する。片袖横穴式石室の1、2号墳とは別系統の石室が導入されたことになる。また5号墳は棺台の配置から1棺埋葬された可能性がある。
- 三. 2号墳は7世紀前半まで追葬が行われ、1号墳では7世紀の墓前祭祀に伴うと見られるピットが確認された。
- 四. バチ川古墳と大原古墳は奥壁左上端部の加工度合いに精粗の差はあるが類似性が窺われる。バチ川古墳、大原古墳には床石が使用されていない可能性がある。

(追記) バチ川古墳、大原古墳の石室実測に際して、休日にもかかわらず木下光弘、庵ノ前智弘の協力を得た。記して感謝します。

参考文献

- 中村 浩 2001 「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」芙蓉書房
大田宏明 2001 「横口式石室について」『大日寺遺跡』河内長野市教育委員会

図版



調査区遠景（東から）



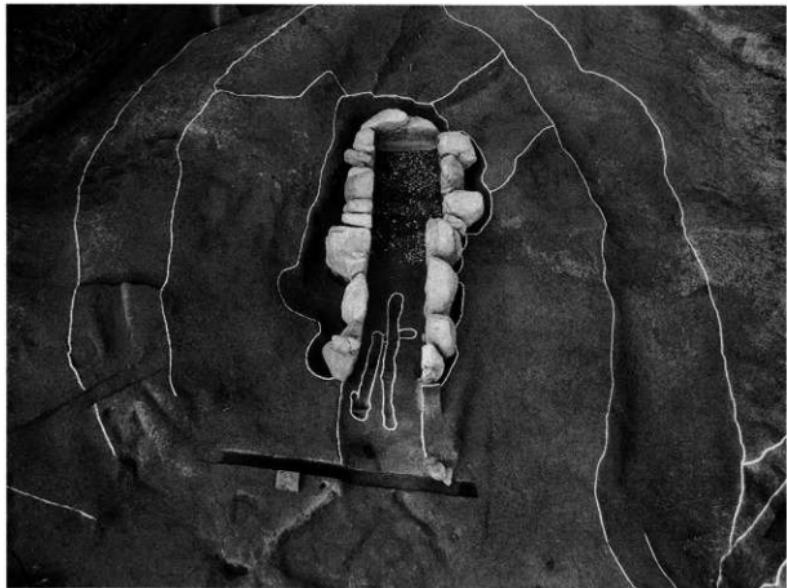
調査区全景（上方が北）



1・2・5・6号墳調査前近景（東から）



1・2・5・6号墳全景（上方が北）



1号墳全景（南東から）



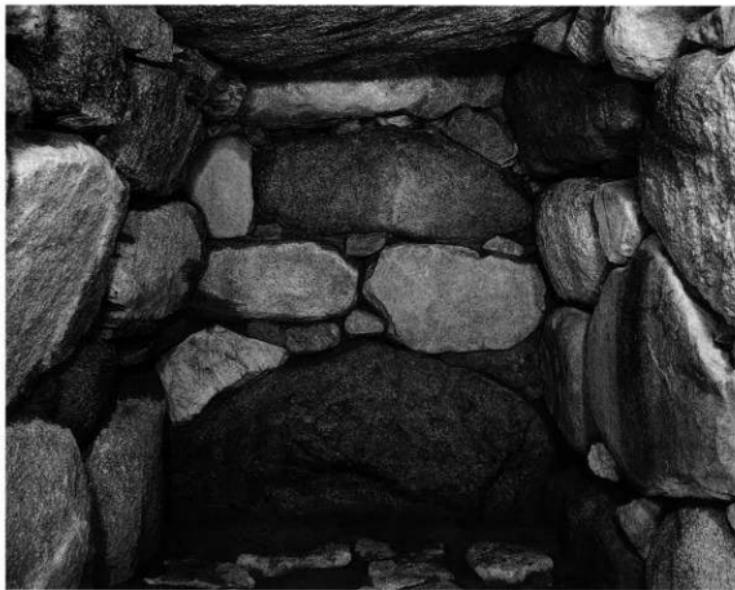
2号墳全景（南東から）



2号墳前面状況（南東から）



2号墳調査状況（南東から）



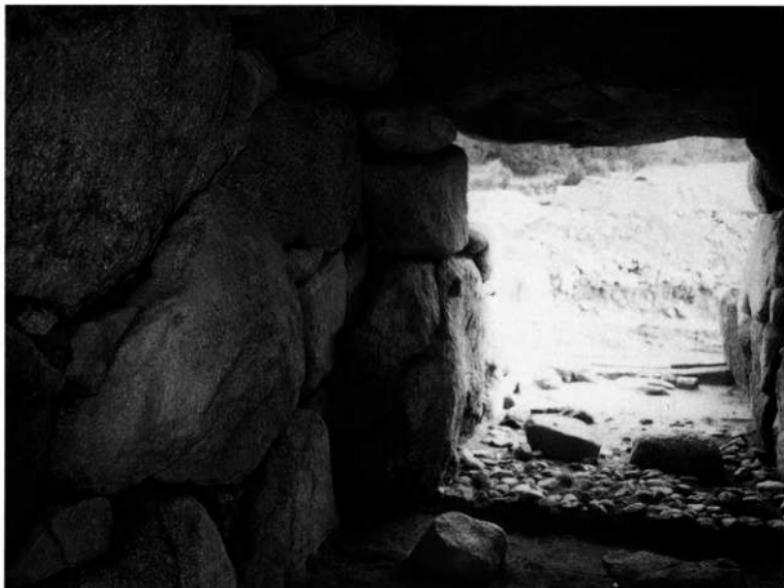
2号墳奥壁（南東から）



2号墳床面と遺物出土状態（南東から）



2号墳右側壁（北から）



2号墳左側壁（北西から）



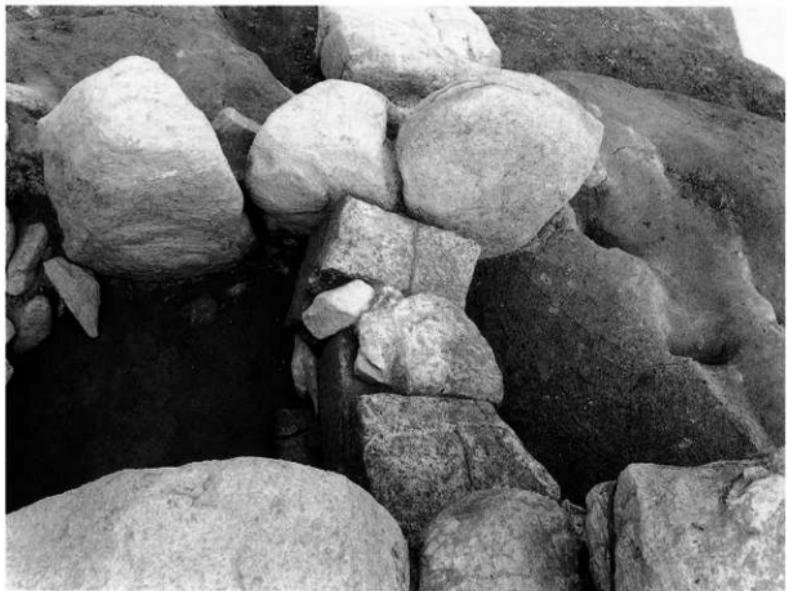
2号墳敷石除去後の床面（南から）



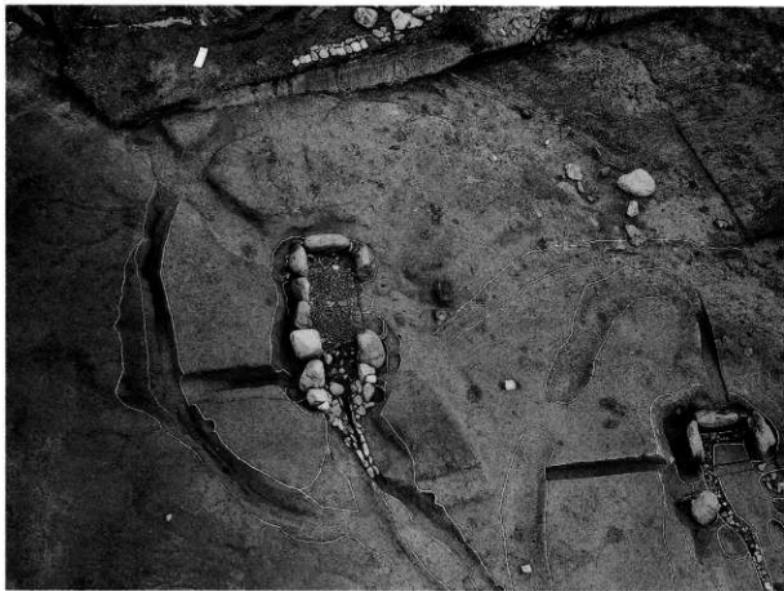
2号墳敷石除去後の床面横断面、木炭屑（南西から）



2号墳閉塞状況（北西から）



2号墳閉塞状況（南から）



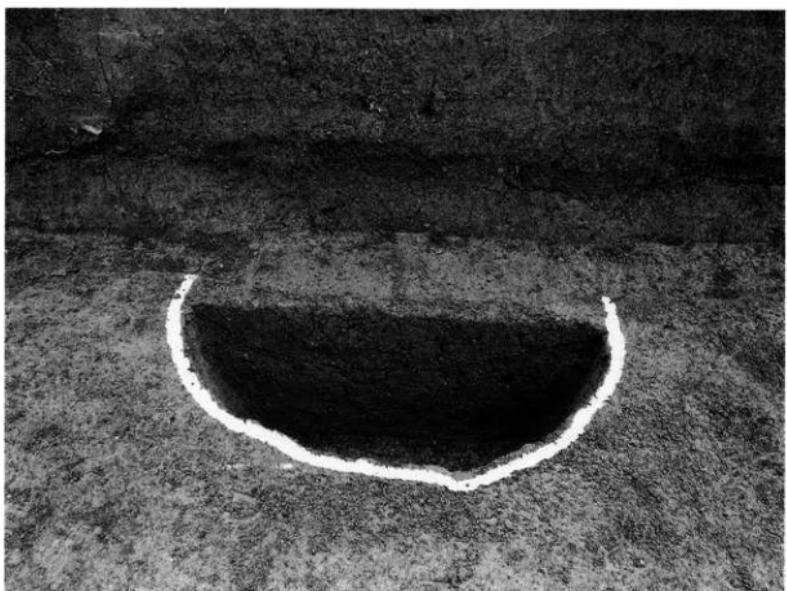
5号墳全景（南から）



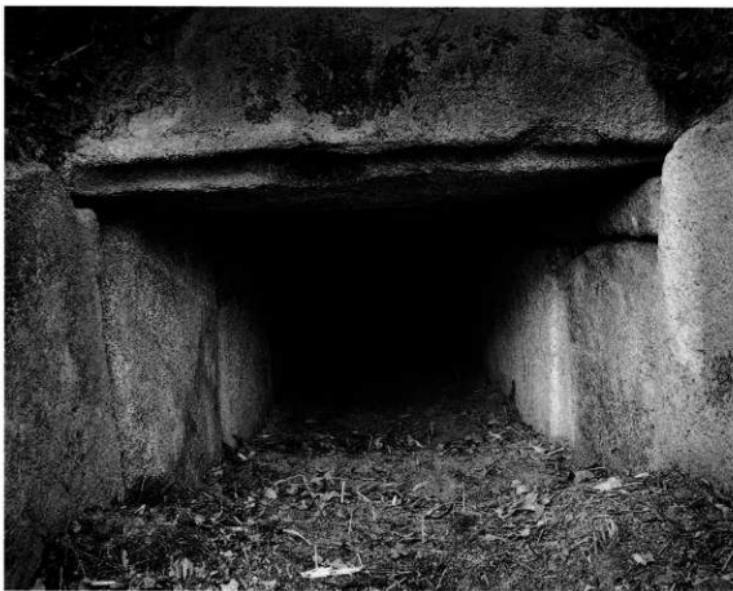
6号墳全景（南から）



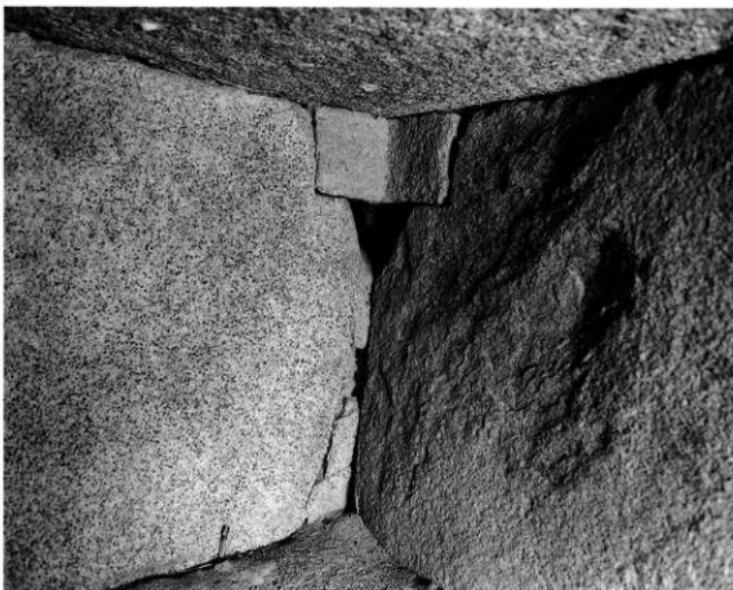
7区全景（東から）



7区土坑7断面（北から）



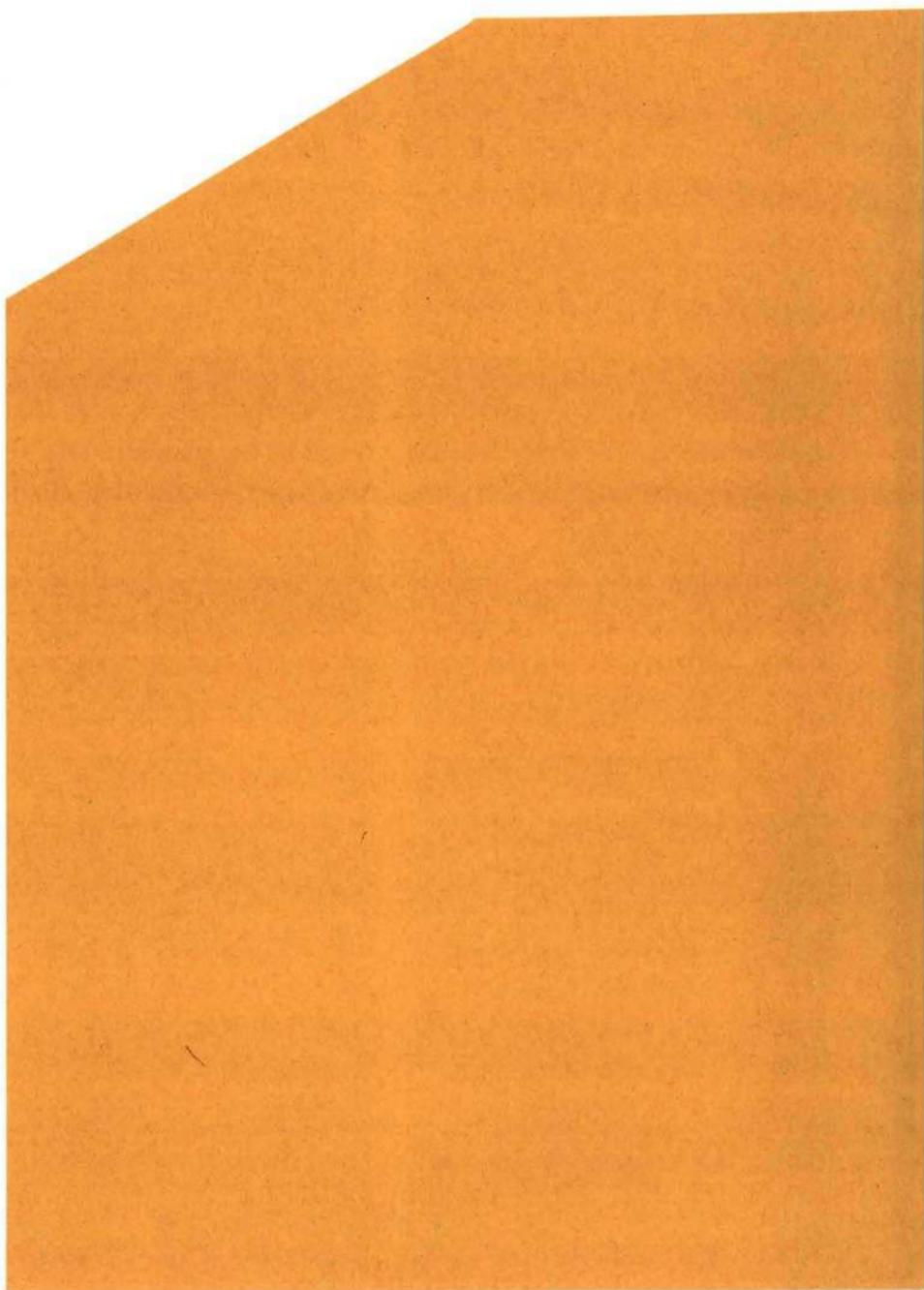
パチ川古墳石室（南から）



パチ川古墳奥壁左上詰石（南西から）

付図1・9区 加納1・2・5・6号墳位置図（大阪府河南町加納所在）





報告書抄録

ふりがな	かのうこふんぐん・ひらいしこふんぐんはくつちょうさがいよう
書名	加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要
副書名	中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に伴う
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	今村道雄
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かのうこふんぐん・ ひらいしこふんぐん 加納古墳群・ 平石古墳群	みなみかわちぐん 南河内郡 かなんちょう 河南町 かのう 加納	27382	37・24	34 29 18	135 38 57	2000年9月～ 2001年3月 2001年8月～ 2002年3月	5.105	中山間地域 総合整備事業 (南河内 ごせ地区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加納古墳群・ 平石古墳群	古墳・ 集落跡	古墳時代～ 飛鳥・奈良時代	横穴式石室を 主体部とする 円墳4基・小 溝・土坑	須恵器 土師器 鉄器 金環 瓦器 製塙土器 石器	黒漆地に赤漆で雲文 を描いた鞘に納めら れた大刀

加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要
-中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に伴う-

発行 大阪府教育委員会
 〒540-8571
 大阪市中央区大手前2丁目
 TEL 06-6941-0351
 発行日 2002年3月29日
 印刷 株式会社弘文堂印刷所
 〒537-0002
 大阪市東成区深江南2-6-8

